

理想団の研究 [I]

有 山 輝 雄

1. 理想団生成の背景
2. 理想団の結成
3. 理想団の組織
4. 理想団の活動——東京本部（以上本号）
5. 地方支部
6. 理想団の成員
7. 第二期以降の理想団

日清戦争後の資本主義化の急速な進行は、さまざまな「社会問題」を発生させ、またそれにたいして「社会改良」を目指す団体も結成された。社会政策学会（1896年）、労働組合期成会（1897年）、社会問題研究会（1897年）、社会主義研究会（1898年）等の諸団体、そして即日禁止されたが社会民主党（1901年）。理想団もこれら叢生した「社会改良」団体の1つであり、勃興する明治社会主義運動の原流ともいわれる。¹⁾しかし、理想団が同時期の「社会改良」団体のなかで独自の存在であったのは、それが「萬朝報」という新聞から生成したということである。本稿の理想団への関心もこの点にある。従って、本稿では社会運動史あるいは思想史等による位置づけとは別に²⁾新聞ジャー

1) 白柳秀湖は「日露戦争前後に於ける平民社の空気は、明らかに『萬朝報』によって企てられた理想団の延長であった」と述べている。「藤村氏の詩及び小説と初期の社会主義運動」『明治文学全集第84巻』399ページ（1965年 筑摩書房）

2) 理想団を政治運動社会運動の側面から研究したのは、飛鳥井雅道「資料明治30年代民主主義運動の一面」（『人文学報』第17号、1962年）、酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』（1978年 東大出版会）

また、理想団の中心人物であった内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦に関する研究は数多いが、本稿はこれら個人の思想を分析することは主眼ではないため、理想団とこれら人物との思想的連関については必要な限り触れにとどめる。

ナリズムの活動という観点から理想団を考察しようとする。特にそのような観点からして内村鑑三、幸徳秋水等の著名な記者の活動した理想団本部ばかりでなく読者(受け手)としての一般団員も視野のうちにおさめていきたい。

「萬朝報」は、1892年黒岩周六(涙香)によって創刊された小新聞である。同紙は、従来の小新聞的記事を洗練し「一に簡単、二に明瞭、三に痛快」という編集規約通り簡潔で読み易い記事スタイルあるいは黒岩涙香の翻訳探偵小説によって人気を博した。が、何といたっても「萬朝報」の紙名を高めたのは、上流社会のスキャンダル暴露摘発記事であった。旧相馬藩主家の主人謀殺密通を暴露摘発したと称する相馬事件、新興宗教の内幕を攻撃した蓮門教事件、政治家実業家の妾を事細かに摘発した「蓄妾の實例」等。これら上流階級のスキャンダル暴露摘発記事によって、「赤新聞」「まむしの周六」などの悪名をあびせられたが、「萬朝報」は都下第一とも称される発行部数を獲得することに成功した。

19世紀末から20世紀初頭の産業化、都市化の進行する時期において新聞ジャーナリズムがスキャンダル暴露摘発記事によって人気を博したのは日本のみの現象ではない。イエロージャーナリズムの語原ともなったピューリッツァーとハーストとの部数拡大競争のなかでの煽情的な暴露摘発キャンペーン^{マツクレイキング}などは周知の通りである。しかも、それまでの新聞を凌駕する発行部数獲得に成功した摘発的新闻が、量的拡大に満足せず、ハーストの大統領選挙出馬、ビーバーブルック等の政界侵出など新聞を背景に実際運動に乗りだす例も少くない。「萬朝報」の理想団もこのような流れの一つとみることもできるだろう。しかし「萬朝報」は、政治に直接向わず、内的に屈折し個人の修養・「社会改良」に向かったのである。そこには、欧米のイエロージャーナリズムと異なる日本の「赤新聞」の特質が潜んでいるであろう。

1. 理想団生成の背景

産業化・都市化の進行のなかでさまざまな社会問題、労働問題、貧民問題

が発生しつつあった1900年前後の状況を「萬朝報」はどのように表象していたであろうか。「一見すれば明治三四年に於ける我日本ハ、殆んど腐敗の絶頂に達したる也、墮落の極度に至りたる也、夫れ政府、政黨、議會、投機師、是等の數者ハ實に奸譎、詐欺、遊惰、姦淫、殺人等の有ゆる惡徳を代表せるの名詞に非ずや、而して是等有ゆる惡徳を代表せるの數者ハ、實に三四年の日本を支配せるの數者に非ずや、是等の數者に支配されたるの日本ハ、實に亡國を意味せるものに非ずや」³⁾。「萬朝報」にとって政治、社会などさまざまに表面化しつつある矛盾、歪みの原因は、創設時の精神を喪失し私利私欲の追求にうきみをやつしている政治家、実業家等の道德的腐敗であった⁴⁾。その腐敗は支配者にのみとどまらず、一般民衆・青年にまで及ぶ。「試みに青年に向て、宗教を説け、理想を談れ、偉人の生活を話せ。彼等ハ冷然として是れ余儕の關り知る所に非ずと曰はん。肉慾を以て充たされたる彼等の脳髓にハ宗教の収容を容るるの余地なきなり。眼前の小利益を趁ふるに汲々たる彼等の心ハ高大なる理想を理解する能はざるなり。⁵⁾」しかしながら当面の状況を道德的頹廢と捉え、その矯正に自己の使命を見出す道德憤慨家的ジャーナリズムは新聞にとって決して新しいことではない。寧ろ、それは1880年代の小新聞に共通するパターンといえる。典型的小新聞として創刊された「大阪朝日新聞」の「吾朝日新聞の目的」は「世人は試みに退いて今日の世態人情を見よ。果して徳義というものあるか、廉恥というものあるか、徳義は廢れて泥に委し、廉恥は除って地を払ひ、其重んずべく貴ぶべきを知るもの百に二、三もなきほどの淺間しき世態人情とはなりしにあらずや⁶⁾」と慨嘆し、「徳義廉恥の頹瀾晩回」を自紙の目的と掲げている。「萬朝報」もこのよう

3) 「萬朝報」1901年12月30日「送歳の辭（上）」無署名であるが『幸徳秋水全集 第3巻』（1968年明治文献）に収録されており、幸徳秋水の執筆とみられる。

4) ただし、社会問題、労働問題の発生を社会の道德的腐敗に求めるのは、決して「萬朝報」にかぎったことではなく当時の社会主義者、社会改良家の一般的発露想であった。松沢弘陽『日本社会主義の思想』参照

5) 「萬朝報」1901年5月18日「青年の思想」

6) 「大阪朝日新聞」1882年7月1日「吾朝日新聞の目的」

な小新聞的な道德憤慨家的ジャーナリズムの系譜につながっているといえるだろう。しかし、多くの小新聞の憤慨は戯作者の勸善懲惡論の域をでず、劣等感を覆う自己弁明の色彩が濃厚であった。そして、政論新聞への劣等感をかくしきれず、次第に紙幅拡大ばかりでなく天下国家的政論を密輸入していった小新聞が多かったのにたいし、「萬朝報」は小型紙幅を維持した⁷⁾ばかりでなく小新聞的発想に執着し「小新聞たるの名誉」⁸⁾さえ説いていた。そのことが、1900年前後表面化してきた社会問題に「萬朝報」が鋭敏であった一因ともいえる。しかも、その認識は「世態人情」という次元から「社會」にまで深化しようとしていた。「政治や、經濟や、法律や、貿易や、商業や、幾多の着目すべき問題あらんと誰も、其百弊の起る所ハ社會の腐敗なり。人の不徳無耻なり。之を是救はずして、彼等の問題を論ず。是本末を誤りたるものと知らずや」⁹⁾ ここには「政治」「經濟」等から独立し、かつそれらを機能させる「社會」への認識がある。ただし、その認識も「社會の腐敗」という病理現象への着目によって始めて成立したものであり、「社會」のトータルなメカニズムへの客観的認識から未だ遠い。従って、局部的病理への熱い痛覚のみが先行し、時には自己陶醉にも陥りがちであった。「之に依りて世の獸欲獸行、而も猶ほ紳士の名を冒せる怪物に対し、耶か省る所あらしむる」¹⁰⁾ と称する「弊風一斑蓄妾の實例」は一面では「痛快」であったが、その過度な私事暴露あるいは虚報は顰蹙をも買わざるをえなかった。しかし、「萬朝報」は「斯の如く腐敗せる社會に立て、苟くも正義を慕ひ、真理を重んじ、真誠の文明を得んと欲せば、之を如何にすべきか。(中略) 不徳無恥

7) 「萬朝報」が小型紙幅を維持した経営的意味に関しては、拙稿「萬朝報経営における「向上主義」とその限界」(桃山学院大『社会学論集』第11第1号)

8) 内村鑑三「小新聞たるの名誉」(『萬朝報』1900年12月『内村鑑三信仰著作全集 第21巻』319ページ)「人は小新聞なればとて卑しめる者があるが、余輩はその何がゆえに卑しむべきであるかを解しない。小新聞たるは、中以下の社会に多くの読者を持つことであって、日本のごとき社会にありては、新聞紙としてこれより大なる名誉はないと思う」

9) 「萬朝報」1898年8月26日 隈溪「社會の腐敗」

10) 同上 1898年7月7日「男女風俗問題」

の人を断んとすれば、其不徳無恥の事實を指摘して、大に之を責めざるべからざるなり¹¹⁾」と暴露記事をと正当化していた。ここでは「萬朝報」は「正義・真理・真誠の文明」という超越的価値を掲げて、「まむしの周六」「赤新聞」という蔑視に対抗しようとしたのである。

しかしながら、社会に瀰漫する腐敗墮落の摘発暴露という外向性の憤慨家であった「萬朝報」も1901年頃から次第に内向化するようになっていった。社内においてこの内的屈折に大きな影響力をもったのは内村鑑三であったとみられる。内村鑑三は、「萬朝報」の暴露摘発に一種の奢りを感じとり、その奢りの裏面に不遇者の劣等感をもみていたのである。内村によれば「萬朝報社は世の不遇者の結合体」¹²⁾であった。たしかに黒岩周六を始め萬朝報社員の多くは、正規の教育体系から逸脱するか或は中途落伍によって「立身出世」の上昇階梯から疎外された者達であった。恐らく官立学校の卒業生は内村鑑三（札幌農学校）と斯波貞吉（帝大）ぐらいであったろう¹³⁾。これら官立学校卒業生も官僚機構から外れた経歴をたどっている。無論、この時期「社会的不遇者の結合体」であったのは萬朝報社にかぎらず新聞界一般の現象で

11) 前掲萬朝報「社會の腐敗」。また、後述する「新聞紙の道德」においても、暴露摘発の時期を反省しながら当時の心情を「自ら新聞を以て我が裁判を行ひ、我が裁判に依りて人か罰し人を懲し、自ら新聞を以て政治をも道德をも行ひ、所謂る道德や風俗の濟さんと欲したり」と告白している。若干誇張があるものの、自らを政治道德の審問官と自認していたというのである。

12) 内村鑑三「退社の辞」（1899年5月『萬朝報』）山本泰次郎編『内村鑑三信仰著作全集第20巻』168ページ

13) たとえば、有力記者数名の略歴を示せば、黒岩周六——1862年生、大坂専門学校・慶応義塾中退、独学、自由民権運動の筆禍により懲役をうける、新聞界に入る。
幸徳秋水——1871年生、漢学塾に学んだ後上京し林有造の書生、保安条例により東京三里外追放、中江兆民の学僕となり新聞界へ。
堺利彦——1871年生、第一高等中学校を学業怠慢により中退、小学校教員をへて記者となる。
河上清——1873年生。米沢藩士の子に生れたが、一家離散。藩校の興譲館に学んだ後、上京。法学院・国民英学会等で苦学した後、「萬朝報」記者となる。
石川三四郎——1876年、埼玉県児玉郡生。上京し、哲学館に学んだが中退。東京法学院を卒業、弁護士試験に失敗。堺利彦、花井卓蔵の紹介で萬朝報社入社。

あった。新聞記者は社会的上昇階梯から逸脱した者が、一面での自由と誇り一面での不安と挫折感に悩みながら当面の生計をえる職業であった。そこに蓄積される社会的、心理的不満は、ときには「社會の木鐸」的言論活動ときには記者の「デカダン」生活として表れる¹⁴⁾。「萬朝報」は、このような「世の不遇者」としての新聞記者を最も先鋭に体现した新聞といえるだろう。明治社会の周辺に位置する一種の限界人として「萬朝報」は、「社会の腐敗」に敏感であり、それを摘発懲罰する。が、その摘発懲罰は腐敗した社会の周辺、外側からのそれであり、その懲罰が真情に基づくものであればあるほど「萬朝報」の視座は前述の超越的「正義」「真誠の文明」に寄託する方へ、即ち眼前の明治社会の外側に位置づけられることになる。この遠心化は、黒岩周六によって「吾徒同志ハ社會以外に確實なる獨立の據所を作り、之に立ちて社會を動さんと欲するなり、地球に立つ者が地球を動し得ざると同じく、社會以外に據らざる者ハ社會を動かすこと能はず」¹⁵⁾と述べられている。「萬朝報」は社会を批判するために腐敗した社会の全く外側に清く正しく「獨立」することになる。

内村鑑三はこのような遠心化を批判し、「萬朝報」が明治社会に内向・内在するように説いたのである。「なんじ（萬朝報）の危険は、平民の贊助を得て、しかし後、なんじみずから貴族的となりおわらんにあり」¹⁶⁾。遠心化的視座からする明治社会への批判は、「平民」の不満を代弁し「贊助」をえることができる。しかしそれ故にかえって「萬朝報」は自らを高所に置き「平民」から遠ざかってしまう危険を指摘しているのである。そして、「貴族的」遠心化から「平民」への視座の内向は、記者自身の内面的自責によって達成

14) 新聞記者の品性随落とモラル確立は、当時よく論ぜられる主題であった。たとえば「萬朝報」1902年2月7日「新聞屋」。また、記者の「デカダン」生活と当時の新聞営業主義化との連関に着目したものには「東京新聞の内景」（1911年）がある。『明治文化資料叢書第12巻』（1960年風間書房）所収

15) 黒岩周六「明治三二年始の紙上に記す」「萬朝報」1899年1月1日

16) 内村前掲「退社の辞」

されると説いた。「社会を責むると同時になんじ自身を責めよ。ののしって卑言を発するなかれ、平民の友たるは、常に自身平民の資格を守るにあり」¹⁷⁾

そして、内村鑑三の影響により遠心化から内向性へ屈折していった黒岩周六は、その屈折過程と新しい方向を「新聞紙の道德」（1901年6月19日～6月25日7回連載）において公表した。その屈折過程は

第一に「破壊」から治療。「萬朝報」の腐敗摘発は、その動機において「一點私心を挟まざる」ものであった。しかし、その機能においては社会・理想の「破壊」に終わっていたという反省から出発する。そして「理想に遠きの故を以て社会を破壊するハ社会を理想に接近せしむ所以に非ず、社会をも理想をも両ながら傷くるに過ぎず、社会をも政治をも、社会とし政治として存せしめ、恕し得る限り其の病を恕して、而して理想を以て之を救ふこと、看護者が病者に對するが如く成らざる可からざるを知れり」¹⁸⁾と、病める社会の看護治療に目指そうとした。これから分る通り、一見甚しく秩序紊乱破壊的にみえる「萬朝報」の暴露記事もその動機においては秩序維持的であり、腐敗の公然化による「社会規範の強制」機能によって自己合理化をはかっていたのである。従って、暴露記事が社会規範に逆機能を果しているという反省が一つの屈折点になりえたのであった。そして、そこからの新方向も決して新しい社会の創出を目指すものではなく、病理に悩む既存社会・政治の健康回復のための看護治療と発想されたのである。が、前述の通り、それも社会全体のメカニズムへの認識を欠いたところでは局所的対症療法に陥る危険性を蔵していたともいえる。

第二には「不平」から「實行」。それは、「然れども吾人豈に朝報の執り來

17) 同上。本稿は内村個人の思想を分析することは目的の外にあるため、何故萬朝社内において内村鑑三が内向への視座をもっていたかに深入りできないが、恐らく内村鑑三は教育勅語不敬事件などにより明治国家の外へ排斥された体験をへることによって逆に「平民」へ内向する視座を獲得してきたのであろう。「世の不遇者」よりずっと遠く疎外されることによって萬朝報の遠心化の底の浅さをみたともいえる。

18) 「新聞紙の道德（7）」「萬朝報」1901年6月25日

りし旨義の一切を擧げて悉く是なりと云はんや、今に到りて大に昨非を悟りたる覺ゆる如き箇所亦無き非ず、其の箇所とハ如何、曰く、吾人が余りに不平の人たるに過ぎたることは是れなり、啻に不平に過ぎたるのみに非ず、正直に吾人ハ絶望の人たりしなり」¹⁷⁾と述べられた。これは、前述の通り内村鑑三が最も批判した点である。不平憤慨にまかせ、他人を責むるに急であるが自己自身を見失っている。これを反省した「萬朝報」は「吾人が精神の在る所ハ、終始一毫の變化無しと雖も、今ハ聊か實行の眞の道路を見出し得んとするに近きたるに似たり」と自らの「實行」に向こおうとした。しかし、この「實行」はきわめて多義的であった。内村の考える「自省」「自責」を包含しながらも、のちに次第に明らかになる如くそれ以外の多くの意味をも含んでいたのである。が、この段階ではそれは未だ表面化してはいない。

第三には絶望的孤立から連滞へである。従来「萬朝報」は「所謂先輩なる者の無信實、無精神、無爲、無識に絶望し、政治なる者の穢きに絶望し、社會、風俗、交際の浅劣なるに絶望し」¹⁸⁾た。「而も社中同人の外に事を共にする友も無く力を合す可き同志も無き者と信じたり」、それ故、明治の社会からますます遠心化し「社會以外に獨立の據所」を求めようとしたのである。しかし、「必ずしも絶望を以て憤慨し無視し獨立するのみを守る可きに非ず、知らず果して、吾人の此心を諒とし與に俱に同じ道路を歩む可き人あるか、先づ吾人ハ之を求むるより初ざる可からず²¹⁾」。他者の攻撃から自らの「實行」に転じた「萬朝報」は、その「實行」をその「社中同人」にとどまらず広く読者にまで拡大していくことをめざしたのである。

このように「社會の腐敗」摘発暴露を呼号し、社会から遠心化していった「萬朝報」は、「腐敗」の治療を自ら実行することに転じ、その連帯を広く求めていくことによって明治社会へ内向・内在化していこうとするようになった。

19) 同右

20) 同右

21) 同右

た。そして、その延長上に理想団を成立させることになったのである。

2. 理想団の結成

理想団は、1901年7月2日の「萬朝報」紙上に発表せられた黒岩周六述「平和なる檄文」によって創立が宣言された。以後、黒岩は「理想団に就て」（7月4日）、「善を為す勇氣」（7月9日）等の論文を発表し、繰返し理想団の趣旨説明と読者の参加を訴えている。これらの論文は、いずれも黒岩周六の個人名で発表されているが、理想団設立は萬朝報社社内の討議のなかから生まれてきたものであった。この社内討議の中心は内村鑑三であったようだ。堺利彦によれば、当時萬朝報社内には、内村鑑三、山県五十雄、斯波貞吉、黒岩周六、幸徳秋水、堺利彦等の出席する月曜談話会と称する定期的会合があった。この会が「朝報社新運動の動力となっている、ツマリは内村の勢力²²⁾」でここから理想団が生まれたという。当時の萬朝報社内において内村鑑三の名望が高く²³⁾、黒岩周六もその影響を受けていたことは、前述の「新聞紙の道德」からも窺え、理想団設立にも内村に負うところが大きかったであろう。

7月15日には、発起人より「理想団発起集会」開催が呼びかけられた。発起人は、内村鑑三、黒岩周六、山県五十雄、幸徳伝次郎、円城寺清、天城安吉、堺利彦、斯波貞吉の合計8名。全員が萬朝報社員であった。そして、7月20日神田錦町青年会館に発起集会が開催され、理想団は正式に発足した。この理想団がいつまで存続したかは明らかでないが、ここでその時期区分として次のように考えてみる。

22) 堺利彦「三十歳記」（『堺利彦全集 第1巻』1971年 法律文化社）の6月26日、7月1日。堺は、月曜談話会の出席者として社内の国権派の中心人物円城寺清（天山）の名を挙げていない。円城寺が内村等と疎遠であったのか、出席していたのに堺が単に挙名しなかったかは不明である。尚、円城寺は理想団の発起人には列している。

23) 松井廣吉（柏軒）は、「『萬朝報』の一大明星として輝いたのは、何といたっても内村鑑三先生であることは誰も否定し得ない。黒岩氏をして理想団を組織させたのも先生だ」と述べている。（松井廣吉『四十五年記者生活』1929年 博文館）105ページ。

第一期（1901年から1903年）創立から内村，幸徳，堺退社まで。

第二期（1903年から1911年）内村等の退社から新「主意」発表まで。

第三期（1911年から1920年）新たな「主意」から黒岩の没年まで。

第四期（1920年以降） 黒岩没後。

この時期区分のなかで，理想団の活動が最も活発であったのは第一期であり，以後は度々再建が目指されながら次第に衰退過程をたどったとみることができる。本稿でも重点的に取り扱かうのは第一期である。

結成第一期の理想団の目的，組織等については黒岩周六の一連の論文や発起集会で決定された「宣言誓約團規」に知ることができる。理想団がその目的として掲げたのは腐敗した「社會の救済」「社會改良」であった。が，社会といっても様々な側面があり，「從來社會の改良と稱したる者あり，今も亦之あり」。これらに対し「理想團ハ悉く之を顧みるに違あらざる可し，一意唯だ人心を以て進前の目標とハ爲すべし」²⁴⁾と，「人心」の改良を第一義とする。それでは「人心」の現状をみれば，「政治にも教育にも，遺憾ながら宗教にも，社會公衆の信任に依りて立つ一切の公の事業にも，私利私心の爲の腐敗墮落せざる者執れに在るや，若し社會が破れ傾く時ありとせば今日正しく其時なり。」²⁵⁾という惨状である。これにたいし「公義の心」を復興せねばならない。これが「社會救済」である。がその方法はまず最初に個人の「修養」である。そして次に，「修養」を目指す各個人が団結する。これが理想団である。そして，この理想団が外に外に活動の輪を広げていけばやがて社会全体の改良に達するというのである。たとえば「理想團ハ個人相合して此の自ら改むるの道を歩まんとするに外ならず，社會に公義心無からんか，理想團先づ公義の心を發せん，社會に制裁無からんか，理想團先づ其制裁を團以

24) 黒岩周六述「平和なる檄文」「萬朝報」1901年7月2日

25) 同右

内より行ひて之を團以外にも及ぼさん、政治にも宗教にも教育にも商業にも、公心義心の絶えて私心、利心の専らなる所ハ；總て此團結の進みて力を加ふ可き所に非ずや」²⁶⁾といわれた。

この團結の最初の核は「社會に尽す可き志を以て集れる者」である萬朝報社中にある。そして「今より更に作る所ハ、同志を朝報の讀者中に求むるに在り、讀者と社中と團員と爲り、次にハ團員各自、最も手近き人を説きて團員と爲し、團員より團員を生じ、及ぶ可きだけ多く且つ廣きに渡らしめん」²⁷⁾まさに「萬朝報」の投じた一石が波紋をえがくように社會に広がっていくことが期待されていたのである。ここにみられるのは、各個人の「修養」をそのまま延長・拡大していけば社會に到達するという認識である。いわば、個人の総和としてしか社會を把握していなかったのである。²⁸⁾既に触れた通り以前の暴露摘発キャンペーンにおいてもみられたこのような社會認識は、理想団においても発現した。個人の総和としての社會という認識は、個人を始点とした場合は個人から社會へ向う理想団の活動を発想させたが、逆に社會を始点としたときには社會から個人へという方向に逆転してしまう可能性をはらんでいた。個人の総和として社會がある以上、逆に社會は個人に還元できるからである。このことは、理想団の発足当初から意識されており、「若

26) 同右

中江兆民も「萬朝報社の理想団の唱は、正に此時機を窺破する有りて爾る耶」と賛意を表し、「團員諸君、諸君の志を伸べんと要せば、政治を措て之を哲學に求めよ、蓋し哲學を以て、政治を打破する是れなり、道德を以て、法律を壓倒する是れなり」と彼の理解した理想団の精神を激励した。（『一年有半』岩波文庫）

27) 同右

28) 理想団の宣言等は、ほとんど黒岩周六によって書かれており、このような社會認識も黒岩周六のものであったろう。理想団のなかでも幸徳秋水や堺利彦は社會主義者としての社會認識を深めており、逆に内村鑑三はキリスト者として内面への沈潜を深めており、ともに個人と社會を短絡していたとは思えない。が、社會主義とキリスト教という全く相反する方向を向う者を理想団のなかにおいては黒岩的社會認識が調停していたとみることもできる。

し順則を云へば先づ心を清くし其の自然の影響を以て範囲内の一切の汚濁を消滅せしめんと期す可き者なれども」「時にハ直ちに範囲内に存する悪弊を攻めて其結果を人心に及ぼさんとする變則の手段を取ること無きこと能はず」²⁹⁾と予告されている。後にこの問題は社会改革の手段として政治を採るべきかという形で表面化することになるが、発足時には飽迄も「自身を改良して、しかる後に社會を改良せん」³⁰⁾ということで「變則の手段」はおさえられていた。

発足した理想団の目的や方法が、明治社会の外側から腐敗を摘発攻撃していた「萬朝報」が、社会の内側に入り、社会の治療にあたり、さらに広く連帯をもとめようとした内向化の実現であることは明らかであろう。しかも、言論活動を展開するにとどまらず、自ら実践の主体と化し、実際に組織をつくりあげようとしたのである。

3. 理想団の組織

理想団の組織、団員の日常活動は、基本的に「理想團團規」に定められていた。³¹⁾ 団規は次の通りである。

第一条 理想團ハ團員の誓約に基き。身を正しくして人に及ぼし。以て我社會全體を理想に近からしむを目的とす。

第二条 團員ハ便宜の時。便宜の處を選び集會して思想を交換す

第三条 評議員を置き常に團務の進行と團體の發達とを計る

第四条 社會公共の利害善惡に對してハ隨時に團の意を發表し其遂行に勉む

第五条 團員の比較的多き地方より初めて漸次に支團を作り、相共に應援

29) 黒岩周六「理想團と政黨」「萬朝報」1901年7月20日。このような変則には特に内村鑑三は反発したであろう。

30) 内村鑑三「理想團は何であるか」「萬朝報」1901年10月16日

31) 「萬朝報」1901年7月22日

して團の意を實行す

第六條 團員ハ團の費用を支ふる爲め隨時應分の金銭を寄附す可し（但し寄附ハ最小額を金十錢とす）

ここで定められている理想団の活動は、団員の日常活動としては集会による「思想の交換」、また 団全体の活動としては 社会公共問題にたいして「團の意を發表し其遂行に勉む」ることである。そして、これを実行する組織は、評議員と地方支団のみという簡素なものであった。黒岩が「加入者の數、或程度に達し、成文の規則を要する如き場合に至らば、隨時に規則をも作らん、議決の方法をも定めん、其他必要の設備をも執行せん、初の中ハ誰だ同志者の常識を以て一切の判斷を實行し決行し行くことを得んなり³²⁾」と述べている通り、理想団は厳格な規律によって運営される組織ではなく、可能な限り団員各個人の自発性と常識的判断にゆだね、規則等は必要に応じて定める柔軟な組織と考えられていたのである。が、各個人の自発性を尊重するにしても、中央の評議員と地方の支団の二つの組織によって団員相互の「思想の交換」を実現していくことが理想団組織の課題であった。

評議員の選出に関しては、發起会席上黒岩周六から「評議員ハ發起者及び發起者と同數の團員を以て之に充て、且人名ハ發起人にて指名せんこと」との提案があり、可決された。しかし、發起人以外の評議員の指名は容易に実現されず、12月21日に至って漸く發表された³³⁾。この評議員決定の遅滞は、發起人達が理想団評議員構成の方向性を容易に見出すことができなかったためとみられる。堺利彦はこの間の内情を「理想団のこと、黒岩はただうちすてている、何という了見か少しも分らぬ、あれを立ち消えにしては黒岩の面目が立つまい、万朝報の信用もつなげまい、我輩は内村に説いて黒岩に迫ってもらった、またその返事はない、内村も持てあまして、黒岩も同様で

32) 黒岩周六述「平和なる檄文」「萬朝報」1901年7月2日

33) 形式上、この評議員は仮評議員とされ、1902年5月18日の理想団大会において正式承認という手続きをとっている。

あろう、いかにも残念でならぬ、この間我輩は千葉の支部大会に臨んで、本部の近況はと質問せられはなはだ窮した、ぜひ何とかせねばなるまい、我輩自身のふがいなきことはむろんであるが、他の人もまたずいぶんふがいない真に頼もしい人はいないかしらん³⁴⁾」と、日記に記している。黒岩も「ただうちすてて」いたわけではなく、この時期普通選挙期成同盟会に加入する³⁵⁾などの行動をとっており様々な模索をおこなっていたように見える。

結局、決定された評議員は次の通りである。内村鑑三、黒岩周六、山県五十雄、山県悌三郎、幸徳伝次郎、円城寺清、天城安政、堺利彦、斯波貞吉（以上萬朝報記者）、花井卓蔵、小川平吉、朝倉外茂鉄、塩谷恒太郎、高橋秀臣、安部磯雄、佐治実然

このうち、安部と佐治はユニテリアンであり、幸徳等とともに社会主義協会会員でもあった。高橋は憲政本党院外団で当時の足尾鉍毒問題等の活動家。また、花井、小川、朝倉、塩谷はいずれも弁護士で江湖倶楽部のメンバーであった。江湖倶楽部は、少壮弁護士や学者等を会員とし、「社会ノ腐敗、士氣ノ銷沈（ノ）……恢復ヲ試ミ刷新ヲ行フ」ことを目的とする団体であった。³⁴⁾「社会ノ腐敗」を慨嘆する点に共感があったのか、理想団発起の発表があるや直ちに賀詞を寄せ、発会式席上にも祝辞を贈っている。

これら指名された評議員は、いずれも当時の鉍毒問題、社会主義運動あるいは政治運動の活動家であり、これら運動に参加していた萬朝報記者と様々な親交をもつ人物ばかりであった。彼等は、いわば萬朝報周辺の都市知識人であり、思想的にも萬朝報記者の多面性をそのまま拡大した観がある。また彼等は、社会運動政治運動の経験と知識を有し、運動の実動性という点では堺利彦の言う「頼もしい人」であったろう。実際、評議員決定によって理想

34) 堺利彦「三十歳記」『堺利彦全集第1巻』（1971年 法律文化社）378ページ

35) 「労働世界」1901年9月1日。普選同盟会側からすれば、黒岩や理想団を通じての普選運動大衆化が期待されていたことが同紙記事から窺える。

36) 江湖倶楽部については、前掲酒田書206ページによった。

団の運動は活発化したのである。しかし、萬朝報記者の発起人もふくめこれら評議員は、下部からの代表性を全くもっていなかった。発起人指名という選任方法は創設期やむえない方法であったが、規約に評議員選出の規定がない理想団にあっては、これが固定化してしまう危険が存していた。

一方、地方支団については、理想団発起人は、組織化の端緒をほとんどもっていなかった。「一郡(又ハ交通の便利の一郡にも等しき部落)に団員の二十若くハ三十に達せる地方に對して支團會組織に着手せんことを望む³⁷⁾」との要望を発し、下から全く自成的に組織化されることを期待していたのである。地方支団結成にあたって本部の為しうるところは、「急速に名簿を整理分類して、孰れの地方より初む可きやを示すこと」にすぎなかった。このような楽観的組織化にもかかわらず、いくつかの支団が結成され、また支団結成に至らぬまでも一定地域で多量の加入があったのである。これら支団の実態に関しては後章で述べるが、自成的に生れた支団は、本部の下部組織というより、思想的影響下にあるとしても組織的には半独立的存在であった。支部とは、主に「萬朝報」というメディアを媒介として結合していたのである。

このように、理想団の組織は、「萬朝報」の役割抜きには考えられず、また理想団の活動、団員の動向等を通して「萬朝報」の媒介するコミュニケーションの流れを観ることができるであろう。

それでは、「萬朝報」の発起に呼応した理想団加入者の構成はいかなるものであったか。理想団加入者の相当部分が「萬朝報」読者と重複していたであろうことは容易に推定できるところである。「萬朝報」読者のなかでも特に「萬朝報」言論に積極的支持共感を寄せていた層が理想団加入者の中心的部分を形成していたであろう。

1901年7月4日の第一回から1903年1月6日の第71回まで「萬朝報」紙上に発表された「理想団加入者報告」から集計した加入者総計は、のべ3166名であ

37) 理想団発起人一同「來會せし諸君に謝す」「萬朝報」1901年7月22日

る。³⁸⁾ 理想団は加入申込にあたって「住所姓名職業」明記を条件としていたが、紙上に発表された名簿には「住所姓名」しか記していないため職業構成はほとんど不明であり、道府県分布しか知ることにはできない。道府県の分布は、表1に示した通りである。これから分る通り理想団員は全国にくまなく分布し、沖縄をのぞけば理想団員が存在しなかった道府県はない。が、概して西日本に少く、東日本に偏在している。特に関東地方のみで約55パーセント強をしめている。これは、「萬朝報」の読者分布の反映であろう。最多数の団員が居住していたのは、言うまでもなく東京である。東京は区部のみで約30パーセントを占め、府下と横浜を合算すれば約35パーセントとなる。都市居住者が人数的には理想団員中大きな割合を占めていたといえる。しかし、各県の団員は東京から同心円的に漸減していく傾向はみられず、東京以外で最多数が存在したのは長野県(270名)である。その他、北海道(194名)、千葉県(176名)、茨城県(163名)などが多く、東北地方では岩手県(86名)、福島県(62名)が多いことが注目される。西日本では岡山県が70名と多い。

また、加入の状況は、一人もしくは二、三人の個人が加入の型と町村等地域単位の多数一括加入の二つの類型が存在する。東京では、一括加入の例はなく、全て個人加入であり、一括加入は地方にのみみられる現象である。一定地域から多数一括加入の場合は、支団(支部)結成にまで進んだ例が多く、これら状況に関しては具体的に後述するが、支団(支部)結成が確認される

38) 筆者が「萬朝報」紙上で確認しえた「理想団加入者報告」は1903年1月6日(第71回)までであるが、第71回には「加入者報告」掲載を中止する旨の注記がなく、この回をもって掲載中止したのか、筆者が以後の回は見落したかは不明である。

また、1901年7月28日付「萬朝報」の第2面は、輪転機への鉛版据付けの誤りから府下一部区域に21日の第2面が印刷されたものが配達された。現在マイクロフィルム化されている「萬朝報」は偶然この印刷誤りの版であるため、同日に掲載されている筈の第25回は確認できなかった。

尚、飛鳥井雅道氏は1902年までの加入者を集計され、2908名とされている(飛鳥井雅道「資料明治30年代民主主義運動の一面」『人文学報』第17号)。筆者の集計では1902年12月29日(第70回)まででも3091名であり、若干相違がある。

表1 理想団加入者道府県分布

| 道府県名 | 人数 | 構成割合 | 女性 | 道府県名 | 人数 | 構成割合 | 女性 |
|---------|-----|--------|----|------|------|------|----|
| 東京(区部) | 940 | 26.69% | 10 | 兵庫 | 34 | 1.07 | — |
| (府下) | 77 | 2.44 | 2 | 奈良 | 6 | 0.18 | — |
| 神奈川(横浜) | 107 | 3.37 | 3 | 滋賀 | 21 | 0.66 | — |
| (県下) | 95 | 3.00 | 1 | 和歌山 | 7 | 0.22 | — |
| 埼玉 | 70 | 2.22 | 1 | 岡山 | 70 | 2.22 | — |
| 千葉 | 176 | 5.55 | 1 | 広島 | 14 | 0.45 | — |
| 栃木 | 42 | 1.33 | — | 鳥取 | 6 | 0.18 | — |
| 群馬 | 88 | 2.79 | — | 島根 | 20 | 0.63 | — |
| 茨城 | 163 | 5.15 | 1 | 山口 | 16 | 0.50 | — |
| 北海道 | 194 | 6.13 | 1 | 徳島 | 3 | 0.09 | — |
| 福島 | 62 | 1.96 | 12 | 香川 | 10 | 0.31 | — |
| 宮城 | 18 | 0.57 | — | 愛媛 | 16 | 0.51 | — |
| 山形 | 40 | 1.27 | — | 高知 | 4 | 0.12 | — |
| 岩手 | 86 | 2.72 | 11 | 福岡 | 33 | 1.04 | — |
| 秋田 | 14 | 0.45 | — | 佐賀 | 6 | 0.18 | — |
| 青森 | 16 | 0.51 | — | 長崎 | 13 | 0.41 | — |
| 山梨 | 39 | 1.24 | — | 熊本 | 12 | 0.37 | — |
| 静岡 | 76 | 2.41 | 2 | 大分 | 21 | 0.66 | — |
| 長野 | 240 | 7.58 | — | 宮崎 | 3 | 0.09 | — |
| 愛知 | 52 | 1.65 | — | 鹿児島 | 2 | 0.06 | — |
| 岐阜 | 33 | 1.05 | — | 沖縄 | 0 | 0 | — |
| 新潟 | 39 | 1.24 | — | 台 | 17 | 0.53 | — |
| 富山 | 34 | 1.07 | — | 清 | 3 | 0.09 | — |
| 石川 | 7 | 0.22 | — | アメリカ | 2 | 0.06 | — |
| 福井 | 19 | 0.60 | — | 軍艦 | 1 | 0.03 | — |
| 三重 | 15 | 0.47 | 1 | 不 | 4 | 0.12 | — |
| 京都 | 39 | 1.24 | — | 合計 | 3166 | | 46 |
| 大阪 | 41 | 1.29 | 0 | | | | |

のは次の通りである。常総、千葉、木下町（以上千葉県）、土浦（茨城県）、浦和、入間、忍町、本庄町（以上埼玉県）、久良岐、横浜（以上神奈川県）、信濃尻村、安筑、小県（以上長野県）、札幌（北海道）、静岡（静岡県）である。これに対し、最大の人数が加入した東京においては、各地域あるいは学

表2 理想団加入者時期的推移

| 年 月 | 人 数 | 東 京 人 数 | 割 合 |
|-----------|------|---------|-------|
| 1901年 7 月 | 1339 | 613 | 45.8% |
| 8 月 | 365 | 60 | 16.4% |
| 9 月 | 139 | 16 | 11.5% |
| 10月 | 81 | 7 | 8.6% |
| 11月 | 0 | 0 | 0 |
| 12月 | 107 | 21 | 19.6% |
| 1902年 1 月 | 151 | 26 | 17.2% |
| 2 月 | 99 | 10 | 10.1% |
| 3 月 | 100 | 10 | 10.0% |
| 4 月 | 118 | 18 | 15.2% |
| 5 月 | 149 | 41 | 27.5% |
| 6 月 | 0 | 0 | 0 |
| 7 月 | 160 | 36 | 22.5% |
| 8 月 | 53 | 37 | 69.8% |
| 9 月 | 96 | 15 | 15.6% |
| 10月 | 46 | 11 | 23.9% |
| 11月 | 0 | 0 | — |
| 12月 | 88 | 19 | 21.6% |
| 1903年 1 月 | 75 | 0 | 0 |
| 合 計 | 3166 | 940 | 29.7% |

校単位の支部は全く成立しなかった。

また、理想団加入者の時期的推移を見るならば、表2の通りである。1901年7月には1339名に登った加入者は、8月には約4分1の365名に急減し、11月には加入者零の状態にまで至っている。しかし、以後は若干回復し、毎月100名前後の水準となっている。ともかく、最初の7月8月のみで全加入者の約50パーセントが加入したことになる。この加入者の推移には後述する理想団員の状況が密接に関係しているが、全体的に理想団の「社会救济」宣言は、一時的には読者の強い共感を喚起したが、その共感も次第に冷却していったように見える。

しかし、この加入者減少の現象において注目されるのは、初期に大きな割合を占めた東京の加入者減少が特に顕著であり、逆に1902年各月100名前後の加入者が維持されたのは地方加入者によるところが大きいことである。東京の読者は「理想団宣言」に鋭敏に反応し、即時に多数が加入したが、一過性の様相を強く滞びていた。これに比し、地方では加入者の総数は東京に及ばぬが、持続的拡大の様相を呈していた。また、前述の通り地方では支部が結成され、初期加入者の紹介による大量加入の例があるのにたいし、東京では地区・学校等単位の支部結成の動きはなく、紹介加入は一事例しかない。このような加入者推移は、東京と地方との「萬朝報」読者の存在状況の相異によるところが大きいであろう。即ち、地方では一概に言えぬにしても「萬朝報」読者が自己の周辺の読者・非読者、自己の所属する集団へ影響を及ぼし、新たな加入者の開拓・組織化の動向が存在していた。³⁹⁾ 少数でも熱心な読者からの第二次的第三次的な影響の流れが存在したのである。これに対し東京では、読者は周辺への影響力に乏しく、理想団への共感は自家消費され、第二次的第三次的影響の拡大をつくりだせなかったとみられる。それは、東京の理想団員が、地域社会等に十分根ざしていない者、前述の通り職業は不明だが立身出世を目指して上京した書生やその卒業生である知識人、離村向都都会に流入した職人職工層であったと推定できる⁴⁰⁾。いずれにせよ、東京の団員は理想団本部主催の演説会集会に聴衆として参加する機会是有したが、個々に孤立したまま存在し、団員相互の連絡「思想の交換」の機会をほとん

39) 例えば、千葉県山武郡丘山村の加瀬作兵衛は同村14名紹介。茨城県多賀郡鮎川村の益子博は同村57名紹介。長野県上水内郡信濃尻村北村伝右衛門は同村37名紹介。長野県下伊郡飯田町山口深省は同郡47名紹介など、地方では団員の紹介により多人数加入した例がある。これに対し、東京では藤井三郎という人物の紹介で3名加入の一例があるのみである。

40) 前述の通り、理想団加入者報告には職業の記入はなく、理想団から直接「萬朝報」者の社会階層を推定することは困難である。「萬朝報」読者層の研究に関しては山本武利『新聞と民衆』（1973年紀伊国屋）p. 130以下参照。

どもたなかったのである。そこでは、団員の受動化・休眠化が生じ易い。このように、理想団は東京と地方とでは相当様相を異にしていたと推定できる。

4. 理想団の活動——東京本部

前述の通り発起集会後、一時停滞した理想団の活動も、⁴¹⁾1901年12月に漸く評議員制が確立し、活発化した。前述の16名の評議員を中心に理想団本部が構成され、日露戦争までの運動を指導したのである。この理想団本部の活動の特徴は、第一には評議員を中心とするサロンの「思想の交換」であり、第二には評議員から一般団員への一方通行的啓蒙活動である。具体的活動としては、前者は有志晩餐会であり、後者は演説会や「萬朝報」における言論活動であった。

理想団有志晩餐会は、元来黒岩周六の誕生祝の会が理想団の会合に転化したものといわれ、⁴²⁾毎月第二月曜日に築地精養軒に開催することを常例とし

41) 「萬朝報」紙上において理想団沈滞を補完したのは、茶代廃止会であった。茶代廃止会は堺利彦の発起になり、宿屋の茶代廃止という「既に古い問題」を「此儘に棄きてハ、到底此改良事業の實行を見る事ハ覺束ない。そこで我輩ハ茶代廃止會といふ者を起して、多數共同の力をもって之を實行したい」というものであった。発起人堺利彦のほか、賛成者として黒岩周六、伊藤銀二、幸徳伝次郎、松井廣吉が名を連ねたが、全員萬朝社員であった。内村鑑三も「茶代ハ一種の賄賂に有之、其今日の如く我國に於て盛に行はるるに至り候ハ賄賂を以て成立せし薩長政府の施政の然らしめし處と存じ憤慨の至りに存候」「茶代廃止の事たる小事の如くに見えて小事にハ御坐なく、其終局の目的ハ日本國の根本的改造」と賛意を表明している。このように茶代廃止会も「萬朝報」の「社會改良」の一環であり、当然発起者も理想団と重複するばかりでなく、「團體の約束によって、團體の勢力をもって、社會改良の爲に之を行ふ」という運動形態においても同一の発想であった。この時期の社會改良運動が、國家社會の腐敗から些細な日常生活の合理化まで広範な視野をもち、先の内村の言の如く茶代廃止から薩長藩閥に短終化してしまう危険を藏しながらも運動の照準を多様に設定していこうとしたことは見逃せない点であろう。特に茶代廃止会は活動目標を日常生活の一部に限定したうえ、廃止協力・非協力店の「萬朝報」紙上公開など新聞の機能の利用も計算されており、停滞した理想団の可能性の一つを指示していたといえよう。

42) 「萬朝報」1902年4月19日「理想團有志晩餐会の記」に「元來此會の第一回ハ、黒岩君が誕生の祝ひに理想團中の某々數十名を招待したのが起りで」と説明されている。黒岩周六の誕生日は9月29日であるから、1901年の10月か11月に会合があったと推

た。開催は毎回「萬朝報」紙上に告知され、誰でも自由に出席できたが、1円20銭の会費が必要であった。この会費額は当時の「萬朝報」購読料（30枚24銭）の約5倍にあたり、この点では決して気楽な会ではない。⁴³⁾ 会合では晚餐を共にしながら自由に懇談したほか、毎回1名が交代で発題をおこない、それをもとに討論がおこなわれた。⁴⁴⁾ 理想団の運営も実質的にこの会で議決されていた。各会の出席人数は不明だが、会の性格からみて少数であったろう。出席者の構成は、堺利彦によれば30代が主で「職業は、弁護士、新聞記者、教師、学生、商人その外いろいろ」⁴⁵⁾ と述べられている。要するに理想団評議員の江湖倶楽部弁護士、萬朝報記者、早大教師（安部磯雄）などに若干名が参加したのであろう。このようなサロン風の有志晚餐会においては確しに理想団の目指す「思想の交換」は実現した。評議員間には、「社會救済」の方法をめぐって社会主義者とキリスト者さらには弁護士グループなど相互

定される。弁護士の今村力三郎によれば「私が始めて先生（注黒岩のこと）の顔を見たのは明治何年か覚えませぬが、築地の精養軒へお招きを受けて行ったときです。佐治実然、内村鑑三、幸徳伝次郎、堺利彦、小林慶二郎、円城寺清の諸君が同席であったことも今も尚記憶しています。後に承れば、是れは先生の誕生日であったさうですが、之れが今の理想団の濫觴であったのです」（涙香会『黒岩涙香』1922年扶桑社 513ページ）と述べている。恐らく、今村の出席した会合が有志晚餐会の第1回であろう。また、この会に今村等の江湖倶楽員が招待され、評議員の選任が相談されたと推定できる。

- 43) ただし、堺利彦は「理想団晚餐会の記」（「萬朝報」1902年4月3日）において会費1円20銭は少額であるといっている。
- 44) 1901年中の晚餐会各回の主題は次の通りである。
 1月13日、2月10日主題不明。3月10日（「社会観」安部磯雄）。4月14日（「衆議院議員としての実見談」花井卓三）5月12日（「衛生上の談話」加藤時次郎）6月9日（「弁護士の業務」塩谷恒太郎）7月14日（「宗教観（ユニテリアン）」佐治実然）9月8日（「社会主義」幸徳伝次郎）10月13日（「社会主義」幸徳伝次郎）11月10日（「経済談」小手川豊次郎）12月8日（「新聞紙の経営」黒岩周六）1902年以降省略
- 45) 堺利彦「理想団晚餐会の記」「萬朝報」1902年4月3日。このような記事によって会の内容を紹介せねばならないほど、多くの団員には無縁の会であったともいえる。「商人」といっているのは、中村屋の相馬愛蔵ではなかろうか。相馬愛蔵は信州において研成義塾のメンバーとともに理想団に加入し、上京後も理想団会合に出席している。

の間に意見の相違があり、晩餐会で討論された。その結果、対立解消には至らぬまでも相互理解に寄与し、理想団が運営できていたのである⁴⁶⁾。しかし、有志晩餐会に成立していた「思想の交換」は、のべ約3000人もの一般団員とは縁遠いものであった。誰でも自由に参加し、「思想の交換」できる原則であったが、実際は評議員とその周辺のための会合であった。有志晩餐会に出席するため上京した熱心な地方団員も存在したが、全くの例外にすぎない。⁴⁷⁾在京の団員にとっても、会場、会費、開催日あるいは常連出席者などを勘案すれば、出席困難な会合であったのである。理想団幹部は各所にこのような晩餐会が成立することを期待し、その範型として精養軒晩餐会を位置づけていたともみられる。が、実際に同様の会が存立したのは札幌、小島の支部のみにすぎず、精養軒の有志晩餐会は大多数の団員とは縁遠く、本部幹部の自足的な「思想の交換」の会合であったのである。

しかしながら、理想団本部はサロンの晩餐会のみで自己満足していたわけではない。演説会や「萬朝報」の言論活動を媒介として運動の大衆化も志向していた。1901年12月、評議員決定と同時に「分取事件、鑛毒事件等を初め本團が公衆と共に研究す可き問題多々有之候間」演説会を催す方針が発表され、1901年12月から翌年6月まで東京において合計3回（12月25日、2月6日、6月14日）の演説会が開催された。その演説弁士は表3の通り、理想団評議員かその周辺の人物に限定されている。一方において自足的な「思想の交換」を実現していた理想団幹部は、演説会等においては一般団員にたいする一方的思想の送り手として登場したのである。無論、演説という特殊技能を要する場において社会運動の経験を有する彼ら以外に弁士を見出すことは

46) 前掲堺利彦文でも、晩餐会席上で「個人を作らねばだめだ」と言う内村鑑三と「個人を作ると共に社会の組織を改めねばならぬ」と言う安部磯雄とが、対立討論したと述べている。

47) 前掲堺利彦「理想団晩餐会の記」では、「某君が、理想団晩餐会の光景を見たさに、わざわざ岩手県花巻から上京した」と紹介されている。この団員の氏名は不明だが、後述する通り内村鑑三の影響とみられるが花巻には多数の理想団員が存在した。

表3 理想団演説会弁士

| | |
|-----------------------|---|
| 1901年12月25日 神田青年会館 | 木下尚江, 田中正造, 黒岩周六, 石山弥平, 松本重敬, 高橋秀臣, 久津見蕨村, ト部喜太郎, 片山潜, 佐治実然, 内村鑑三, 安部磯雄, 信岡雄四郎, 円城寺情, 幸徳伝次郎, 堺利彦, 丸山虎之助 |
| 1902年2月8日 神田青年会館 | 安部磯雄, 黒岩周六, 幸徳伝次郎, 円城寺清, 堺利彦, 小林勝民, 萩原孝三郎, 田川大吉郎, 佐治実然, 鈴木万次郎 |
| 1902年6月14日 神田青年会館 | 佐治実然, 山県五十雄, 堺利彦, 斯波貞吉, 黒岩周六, 高橋秀臣, 木下尚江, ト部喜太郎, 信岡雄四郎, 花井卓蔵, 幸徳伝次郎 |

困難であつたろう。が、それだけではなくこの時期の理想団幹部には、演説会等をふくめ一般団員に発言の機会を開放していくという発想が乏しかった。演説会等は理想団幹部の上からの一方通行的啓蒙の場であり、一般団員は聴衆としてのみ位置づけられていたのである。

このような一方通行的啓蒙は、「萬朝報」紙面においても貫ぬいていた。全国各地に散在する団員を結合する媒体は、「萬朝報」だけであつた。が、理想団において「萬朝報」が果たした役割は、設立宣言発表以来主として幹部から一般団員への告知啓発であつた。加入者名簿や中央・地方の集会開催等理想団の活動は紙上に掲載された。また、社会改良の手段としての政治をめぐって内村鑑三と河上清が紙上で論争するなど、内部の意見対立も含め理想団本部の活動を「萬朝報」を通して一般団員に公開していこうとする姿勢は窺える。しかし、のべ約3000人もの団員を擁しながら、「萬朝報」紙面には一般団員からの投書、活動報告等の掲載はほとんどない。理想団地方集会の報告も来賓として招待された内村や幸徳による記事としては載せられているが、集会を組織し参加した地方団員自身からの報告・意見の掲載は全くない。「萬朝報」紙面においても、思想の送り手は評議員クラスに固定されていた。「萬朝報」は上からの伝達・啓蒙の媒体として利用されたにとどまり、下からの呼応と更に上からの再回答あるいは団員相互の間の伝達など様々な「思

「思想の交換」を紙上に展開するという機能ではきわめて不十分であったのである。これは、理想団から派生したともいえる平民社を中心とする社会主義運動における「平民新聞」と比較すれば歴然である。「平民新聞」においても平民社幹部の筆になる論文、外国社会主義運動紹介等が大きな比重をもっていた。しかし、それと同時に読者からの様々な投稿にも多くの紙面が提供されていた。社会主義思想への共鳴や質問とそれに対する平民社同人からの回答、各地の活動状況の報告、平民社同人からの設問にたいする読者からの回答など様々な投書が紙面に載せられ、「平民新聞」の不可決の要素となっていたのである。そこでは、平民社同人と各地に散在する読者との間、あるいは読者相互の間の「思想の交換」が「平民新聞」によってある程度成立していたといえる。これは、理想団団規に「思想の交換」を掲げながら「萬朝報」において不十分にしか実現できなかった幸徳秋水や堺利彦の反省から生れたものではなかろうか。

このように「思想の交換」を目指した理想団は、本部では評議員を中心とするサロンの「思想の交換」を生みだした。しかし、そのサロン化した本部は、演説会・「萬朝報」紙上において一般団員にたいする思想の送り手として登場し、一方通行的啓蒙しか展開しえなかった。本部と一般団員との間の上下・縦横などの双方向的「思想の交換」は、きわめて不十分であったのである。そこでは、本部は一般団員にたいし天降りのように問題を提起し、それへの参加を促がすという活動形態をとることになる。具体的に理想団本部がとりあげたのは、眼前の政治特に選挙であった。

まず、1902年の第7回総選挙におたって理想団は「議員予選会」を企画し、その実行委員として塩谷恒太郎、佐治実然、黒岩周六の3名を選定した。これは、理想団員が「投票を極自由に、極正直に使用することを約束」した上、「目下東京市に候補者と名乗る人總体の中にて、幾何か紳士らしく又ハ衆議院らしかる可しと認めらるゝ者數名を豫選」⁴⁸⁾し、本選挙では理想団員の投

48)「萬朝報」1902年7月8日 理想団臨時委員述「総選挙と理想団」

票をこれら予選候補者に集中しようというものである。7月26日、神田美土代町青年会館に152名の出席をえて議員予選会が開催され、鳩山和夫、田口卯吉、江原素六、安藤太郎、山田喜之助の5名が予選された。そして実際の選挙では、このうち鳩山和夫と田口卯吉の2名が当選した。

ついで、1903年3月の第8回総選挙では、花井卓蔵、黒岩周六、山県五十雄、山県悌三郎、斯波貞吉の5名が自由投票同志会を発起した。これは、選挙の弊風を改良するため「我等ハ人を咎む可からず、宜く先づ自ら責むべし、自ら責め自ら戒め、我が自由の領分を堅守して、候補者運動をして甘言も憚請も情實も低頭平身も以て我等の心を動すに足らざることを知らしめば、彼等とても復た其の干渉を遅くするに由無かる可し」⁴⁹⁾という運動であった。自由投票同志会の発起人は全員理想団員であったが、理想団とは別組織としたこと、また前年の議員予選会に比し投票者の自責自戒をより一層強調していることなどから議員予選会には理想団内部に批判があり、自由投票同志会はその批判をとりいれた形で組織されたことを窺わせる。が、理想団と別組織として出発した自由投票同志会も1月下旬「此主意を実際に擴張せんが爲め理想団と協同」⁵⁰⁾することを宣言し、東京市内に15回の演説会を開催したほか、横浜においても演説会を開催した。特に、横浜においては島田三郎応援を明確にうちだし、「萬朝報」紙面でも島田三郎への投票を訴えている。

このような理想団の選挙運動は、いわば選挙の倫理化であり、殊に投票者

49) 「萬朝報」1903年1月22日 「自由投票同志会組織の主意」

自由投票同志会が具体的に定めた事項は次のようなものである。

1. 首として東京市の有権者の賛成を望む
2. 全国各地の有志、亦各自の地區に此旨意を實行せられよ
3. 賛成者ハ住所姓名を東京市京橋區弓町廿一番地自由投票同志會へ通知せられよ
4. 賛成者ハ投票を依頼し來る一切の人に對し一切の手段に對して、我ハ自由意志を以て投票するが故に依頼に應ぜずとの意を明答する事
5. 總て依頼がましき舉動ある人をバ適當の代議士と認めざる事
6. 公平無私の心を以て、自ら純良と認むる士に投票する事
7. 自今選挙毎に勉めて此旨意を擴張する事

50) 「萬朝報」1903年1月31日「至急広告」

の自責自戒を訴えていた点において「人心の改善」という理想団当初の目標から逸脱するものではなかったろう。しかしながら、理想団にとって政治は難問であった。「人心の改善」の一領域として決して政治を度外視することはできない。が、理想団内には「政治を排斥」する内村鑑三がおり、河上清と論争を交していた。当面「人心の改善」の手段としての政治を排するという点では理想団の合意があるとしても、既に触れた通り「變則」と認めながらも政治から人心の改善への逆転、事実上の手段としての政治の採用の発想は伏在していたのである。この点で自由投票同志会は、理想団がその原則を保持しながら政治に接近しうる限界に近かったのではなかろうか。⁵¹⁾ そして、この選挙への接近は、黒岩周六自身の志向もあるが、江湖倶楽部弁護士の影響が強く働いたとみられる。

選挙運動への接近を理想団内においてどのように総括したかは不明だが、以後の理想団の活動は若干異なる方向へ進む兆をみせた。一つは朝報社講演会の発足である。朝報社講演会は、「時事問題に重を置く可き日刊新聞の紙面」では思想を論じ尽くせない萬朝報記者が「思想を以て世を啓發」⁵²⁾ するため開催するもので、会場は数寄屋橋教会、会期は毎月第二、四土曜日、会費10銭、講演者は原則として朝報社員と定められた。萬朝報社内においてこの講演会が理想団とどのような関係に位置づけられたかは不明だが、事実上理想団内の萬朝報記者は理想団以外に活動の場をもつことになったのである。合計6回開催された講演会の弁士は、表4の通り木下尚江以外全て萬朝報記者、殊に理想団発起の中心であった黒岩、内村、幸徳、堺はいずれかが毎回

51) 内村鑑三は自由投票同志会の演説会出席にあたって俊巡したことをかくさず、「少しコジツケのように聞こえる」「3つの抗弁的理由」によって出席したと述べている。その一つは、「私の関係している理想団の発起にかかるこの演説会が弁士の欠之を感じずると聞いて私は沈黙を守るに忍びません。」ということであり、内村は理想団の政治運動に不満を感じながらも、理想団運動にたいする自分の責任だけは果そうとしたのである。内村鑑三「自由伝道と自由政治」『内村鑑三信仰著作全集 第17巻』(1962年教文館) 101ページ。

52) 「萬朝報」1903年4月8日「朝報社講演會を開くに就て」

出席している。これらから、この朝報社講演会は、江湖倶楽部弁護士の影響などから選挙に接近したことを反省した理想団発起者がもう一度萬朝報記者のみの発起時点に回帰し、「思想を以て世を啓發」する運動を試みたとみることができる。

表4 朝報社講演会出席弁士

| | |
|------------|--------------------|
| 第1回 (4.11) | 内村鑑三, 黒岩周六, 山県五十雄 |
| 第2回 (4.25) | 内村鑑三, 黒岩周六, 幸徳伝次郎 |
| 第3回 (5. 9) | 内村鑑三, 堺 利彦, 斯波貞吉 |
| 第4回 (5.23) | 黒岩周六, 幸徳伝次郎, 円城寺清 |
| 第5回 (6.13) | 黒岩周六, 内村鑑三, 中島気浄 |
| 第6回 (6.27) | 幸徳伝次郎, 山県五十雄, 木下尚江 |

また、理想団においても一つ変化の動きがでてきた。それは、理想団有志晚餐会の改組である。従来の晚餐会は「日時、場所等の定限あり、之が爲に出席を欲して差支ふる人も少からずと聞」⁵³⁾ いたことから、毎月開催していた晚餐会を隔月と改め、新たに団員の随意談話会を催すこととした。随意談話会の会期は日曜日の昼間、会費も25銭と安価で従来の晚餐会に比較し一般団員の参加しやすい形式がとられている。この狙いが、従来評議員クラスのためのサロン化していた理想団本部に一般団員の参加を促がし、より広い「思想の交換」によって理想団運動に活気を回復させようとしたものであることは明白である。これは、また先の講演会による思想啓発ともつながっている。

第一回の理想団有志随意談話会は、1903年10月11日神田今金において開催

53) 同右 1903年10月9日 評議員述「理想団有志随意談話会に就て」

これより先、9月26日には朝報社有志講演会が予定されていたが、「組織変更の都合」から休会と広告されている。有志講演会の組織変更と随意談話会設立とは何らかの関係があるとみられるが、事情は不明である。朝報社有志講演会の理想団への移行が計画されていたのか、あるいは随意談話会自体が、従来一方通行的思想啓発であった有志講演会を発展的に解消し、参加者間の思想交換をめざす形式に改組されたものとみることできる。

された。参加者は97名、塩谷恒太郎、黒岩周六、堺利彦、内村鑑三から談話があった。⁵⁴⁾ しかし、理想団にとって難問であった政治は、選挙運動などとは全く別の所から理想団に降りかかってきた。それは、言う迄もなく萬朝報社内における円城寺清、黒岩周六等の日露開戦論と内村、幸徳、堺等非戦論の対立、その結果として非戦論者の退社である。この問題が理想団内において論争された様子はなく、また萬朝報と理想団は別組織であるから内村等は直ちに理想団も脱退したわけではない。しかし、これは理想団運動に一つの段階の終焉を告げる事件であったのである。

54) 内村鑑三の『『朝報』社退社に際し涙香兄に贈りし覚え書』は10月9日付であるし、幸徳秋水も10月11日付石川安次郎宛書簡（『幸徳秋水全集 第9巻』所収）で昨日辞表呈出と報告しているから10月11日の理想団談話会以前に辞表を呈出していたことになる。